

【審査講評】自然や日常に近い風景を画題に選んだ作品が多く、審査員からは「上位の作品は技術が高く、制作者の意図がしっかりと伝わってきた。一方、全体として新しい題材に挑むようなパンチのあるものが少なかった」と評された。

一般応募は昨年から13点減った67点。最高賞の山陽新聞社賞には、水際に集まるカモをモノクロームの色彩で描いた中田紘一（岡山・南区洲崎）の「水辺の楽園」が選ばれた。「対象を丹念に観察し、描きすぎと思えるほど緻密に表現できている」と評価された。

県知事賞は松田くみ子（瀬戸内・牛窓町鹿忍）の「葉っぱ」。色づいて地に落ちた葉と土の構成が面白く「静かに押し出すような強さがある」と賞賛された。5匹のウサギののんびりした姿をバランス良く配した岡悦子（岡山・南区山田）の「集う（大久野島にて）」が県教育長賞。墨色の濃淡で風雅な世界を広げる村本毅（岡山・北区一宮）の「凌霄花（のうぜんかずら）」が岡山市長賞に選ばれた。

委嘱作を対象にした山陽新聞社大賞は、3年ぶりの選出。受賞した岡本徳子（岡山・中区平井）の「秋暑」は「大輪を咲かせた芙蓉の妖艶さと構成の巧みさが印象的だった」と評された。

〈審査員＝池畑秀穂、井手康人、上蘭四郎、森山知己の各氏〉



秋暑
山陽新聞社大賞 岡本 徳子（岡山市）



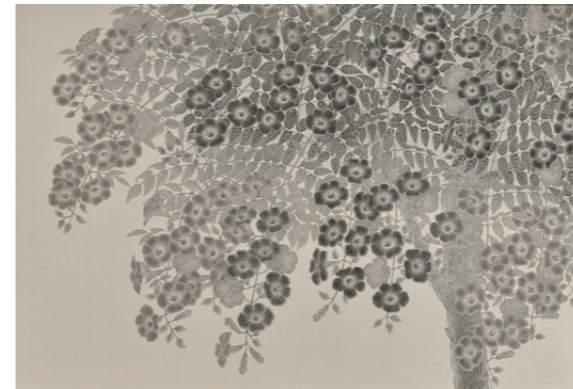
水辺の楽園
山陽新聞社賞 中田 紘一（岡山市）



葉っぱ
岡山県知事賞 松田 くみ子（瀬戸内市）



集う（大久野島にて）
岡山県教育長賞 岡 悦子（岡山市）



凌霄花
岡山市長賞 村本 毅（岡山市）

〔審査講評〕一般応募は昨年から27点減って254点。審査陣からはモチーフの内面まで見つめる深い観察眼を求める声もあったが、自分なりの表現を目指して工夫を重ね、丁寧に描き込んだ意欲作がそろった。上位賞を射止めたのは「確かな技術で独自の世界を表現しきった」作品だった。

委嘱作19点から選ばれる山陽新聞社大賞には、93歳の大ベテラン多賀栄一（玉野・宇野）の「太古からの贈物（おくりもの）・化石」が輝いた。渦を巻くアンモナイトの存在感が際立つ濃密な画面は「エネルギーに満ちていて、色彩感覚も秀逸。鑑賞者を引き込む魅力がある」とたたえられた。

一般応募の最高賞・山陽新聞社賞は、色彩が印象的な2点。反橋由美子（倉敷・連島町西之浦）の「E g g」は、割れた卵が人の顔のようにも見え、背景の鮮烈な赤とともにどこか不穏でシュールな異空間をつくり出した。児島慎太郎（総社・三須）の「道」は、豊かな色彩を巧みに配し、シンプルな風景を引き立てた。

県知事賞を獲得した藤原加奈子（赤磐・下市）の「芳光」は、たわわに実ったブドウの量感とみずみずしさを生き生きと伝えてくる。県教育長賞は後藤杏（岡山・東区瀬戸町瀬戸）の「透明な夢」。ペリカンのユニークな表情と迫力のある構図が好感された。

岡山市長賞に選ばれた岡崎昌吾（岡山・中区四御神）の「SOURYU（そりゅう）」は、モノクロームの点描で表現した木の幹に、卓越したデザイン感覚が光る。藤原光（岡山・東区東平島）の詩情豊かな「砂時計を持つ少女」が県展特別賞を得た。

〈審査員＝石田宗之、泉谷淑夫、小川尊一、岸本和明、日下美千代、河本昭政、立花博、東島毅、山口裕美子の各氏〉



太古からの贈物・化石
山陽新聞社大賞 多賀 栄一（玉野市）



E g g
山陽新聞社賞 反橋 由美子（倉敷市）



道
山陽新聞社賞 児島 慎太郎（総社市）



芳光
岡山県知事賞 藤原 加奈子（赤磐市）



透明な夢
岡山県教育長賞 後藤 杏（岡山市）



SOURYU
岡山市長賞 岡崎 昌吾（岡山市）



砂時計を持つ少女
県展特別賞 藤原 光（岡山市）

〔審査講評〕例年プロの作家が多く出品する工芸部門は、一般応募が98点と前年から8点減少した。審査陣からは100点の大打割れを残念がる声が上がった一方で、「レベルは高い」「自由で楽しい作品が集まった」との感想も。上位には、独自のテーマや美意識を感じさせる作品がそろった。

一般応募の最高賞・山陽新聞社賞に輝いたのは、舟を逆さにしたような形がユニークな小家弘誠（瀬戸内・邑久町本庄）の木工芸「櫻（けやき）造拭（ふき）漆箱」。流線形の器体に真っすぐな木目を浮かび上がらせ「造形とラインがうまく響き合っている」と高く評価された。赤と黒のコントラストと緻密な彫り模様が目を引く坪田容一（岡山・南区万倍）の漆芸「乾漆蒔醬（きんま）箱『露草の小径』」は県知事賞に。器面を横断する何本もの黒い〴〵道、の幅や角度に変化を持たせ「これまでにない感覚のデザイン」とうならせた。

出品作の6割を占めた陶芸は、焼き締めから釉（ゆう）薬もの、染め付け、練り込みまでバラエティー豊か。中でも存在感を放ったのが備前焼だった。

県教育長賞を得た宮尾昌宏（和気・和気町）の「備前堆文（ついもん）平鉢」は、レース状の堆文が窯の炎の動きを映した焼けに呼応するように巡り「リズムカルでまとまりがいい」。岡山市長賞の山根義秋（真庭・富尾）の「花器」は広い器面が窯変で彩られ、一枚の絵のよう。県展特別賞の上堂智子（岡山・北区芳賀）の「備前自然練込縫合線花器」は桃をイメージしたフォルムで注目を集めた。

委嘱作から選ばれる山陽新聞社大賞は、橋本和哉（備前・伊部）の「備前半炭化花器」。端正な筒形の花器のきめ細かな肌が灰、金、黒と次々に変化し「備前焼ならではの味わい深い景色」と称賛された。

〈審査員＝磯谷晴弘、白井洋輔、隠崎隆一、金重有邦、黒井千左、佐藤常子、塩津容子、藤川建然、山本出の各氏〉



乾漆蒔醬箱「露草の小径」
岡山県知事賞 坪田 容一（岡山市）



備前堆文平鉢
岡山県教育長賞 宮尾 昌宏（和気町）



花器
岡山市長賞 山根 義秋（真庭市）



備前自然練込縫合線花器
県展特別賞 上堂 智子（岡山市）



備前半炭化花器
山陽新聞社大賞 橋本 和哉（備前市）



櫻造拭漆箱
山陽新聞社賞 小家 弘誠（瀬戸内市）

〔審査講評〕 6部門中最多の出品数がある書道部門。一般応募は昨年比50点減の1256点（漢字675点、仮名579点、てん刻2点）。新型コロナウイルス禍を経て、上位作には「自己の書風を見つめ直して練り上げた作品」（漢字）、「運筆、構成共にレベルの高い力作」（仮名）が集まった。



漢字は、古典研究を自らの表現に昇華させた作品が抜きんできた。委嘱作の最高賞・山陽新聞社大賞に輝いたのは、北魏調の端正な楷書をしたためた研山照青（久米・美咲町）の「王昌彝（おうしょうい）詩」。「力感みなぎる線が目を引き。余白も巧みに取り入れ、明るい印象に仕上げた」と高く評価された。

一般応募の頂点・山陽新聞社賞は、江原幸堂（津山・国分寺）の草書「秋登宣城謝朓北楼」。「運筆の柔らかさは長年の鍛錬のたまもの。渴筆も効果的で格調高い」と注目を集めた。県教育長賞に選ばれた藤原慧霞（和気・和気町）の「杜甫詩」は、中国・明末清初の書家傅山（ふざん）の筆法に学んだ流麗な連綿の趣が好感された。

県展特別賞は高越霞邨（倉敷・神田）の「山吹」、杉玲峰（岡山・南区福富東）の「壮心」、前田花峰（倉敷・児島田の口）の「仮の世」、高木筑華（玉野・胸上）の「杜甫詩」が選ばれた。



今年の仮名は中字、大字の作品に力があり、華やかな雰囲気との審査となった。山陽新聞社大賞に選ばれたのは、藤本令舟（岡山・北区新庄下）の「つねよりも」。「古筆を基調とした上品な筆運び。行間の幅に変化を付け、後半に盛り上がりを見せる構成も巧みだった」とたたえられた。

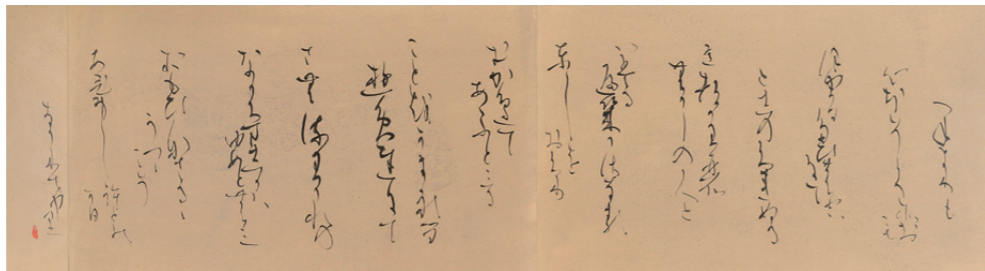
一般応募のトップ・高木聖鶴賞は、斉藤華月（岡山・南区妹尾）の「わがせこが」が射止めた。秋を詠んだ和歌2首をしなやかにつづり「中央にボリュームを持たせ、視線を誘導する展開がいい」と高評価。県知事賞は越智多圭子（岡山・中区倉田）の「しめやかに」で、若草色の料紙に大胆な余白を取りながら、切れのある線を走らせた。東内荘舟（津山・総社）の「いかなれば」は、墨の濃淡の対比で奥行きを生んだ大字作品で岡山市長賞を得た。

柳本順子（井原・井原町）の「天の原」、柴田香玉（倉敷・連島中央）の「小夜ふけて」、鶴川美華（瀬戸内・邑久町豆田）の「かささぎの」が県展特別賞。

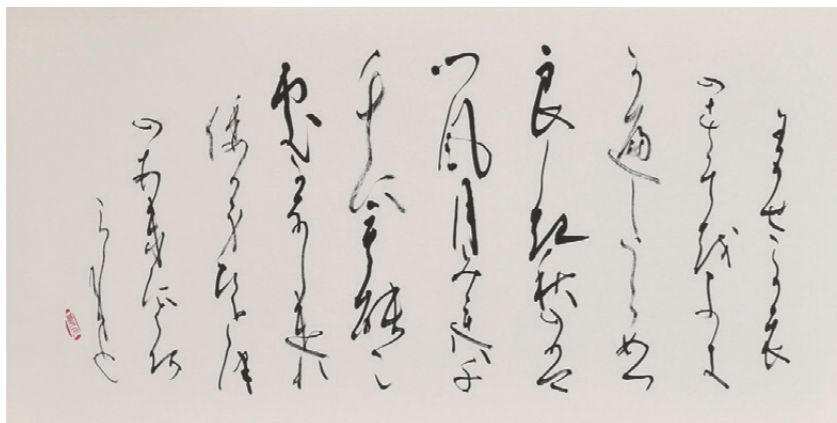
〈審査員＝小野玲華、梶谷純子、草野曾舟、寺坂昌三、富岡閑香、藤川翠香、光枝旭翠、森上光月（以上仮名）大平邑峰、奥田雄山、鎌野望山、小竹石雲、齋藤弘香、澤田虚遊、松嶋碧山、水川桃邨（以上漢字）の各氏〉



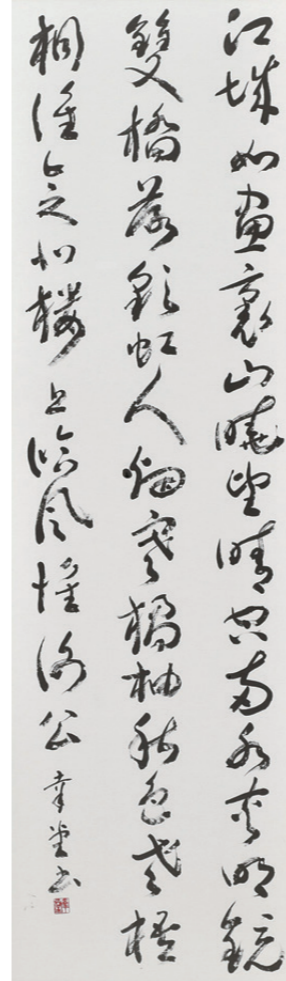
王昌彝詩 山陽新聞社大賞 研山照青（美咲町）



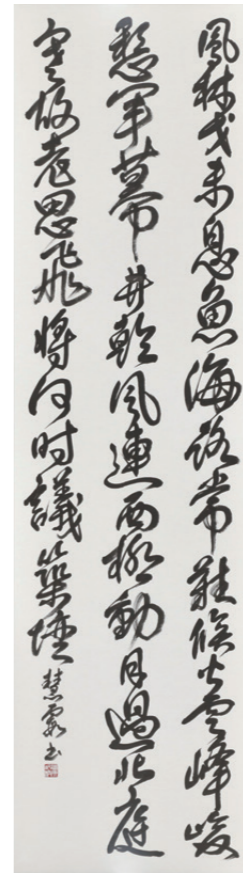
つねよりも 山陽新聞社大賞 藤本 令舟（岡山市）



わがせこが 高木聖鶴賞 斉藤 華月（岡山市）



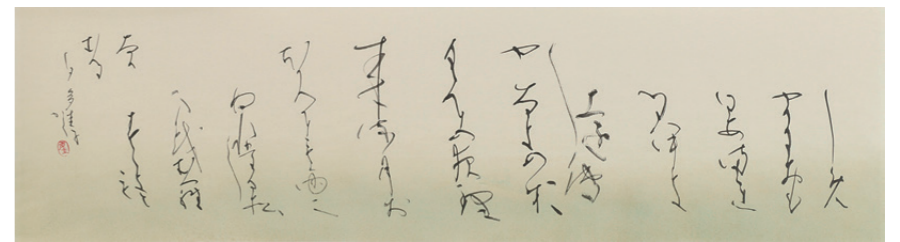
秋登宣城謝朓北楼 山陽新聞社賞 江原幸堂（津山市）



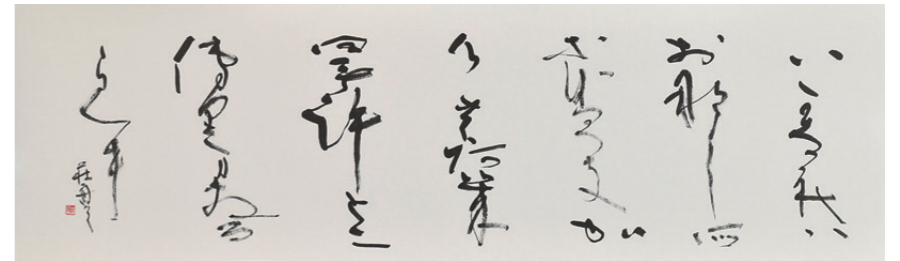
杜甫詩（無鑑査） 岡山県教育長賞 藤原慧霞（和気町）



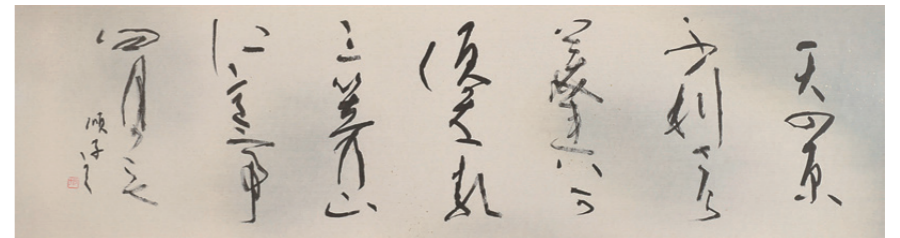
杜甫詩（無鑑査） 県展特別賞 高木筑華（玉野市）



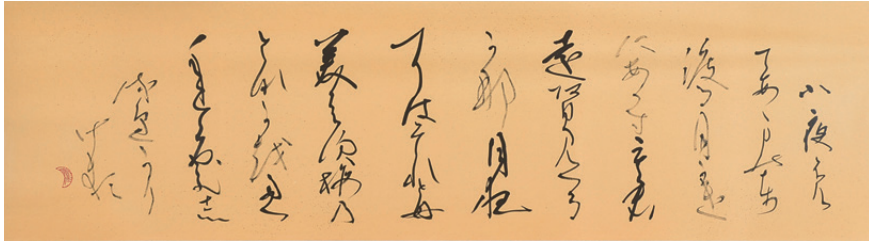
しめやかに 岡山県知事賞 越智 多圭子（岡山市）



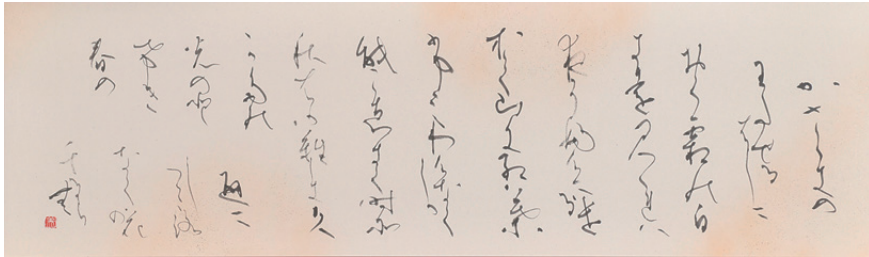
いかなれば 岡山市長賞 東内 荘舟（津山市）



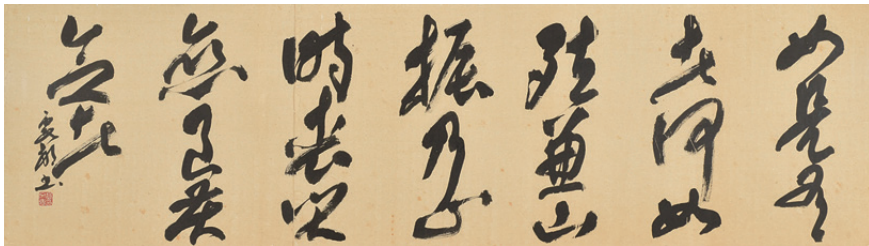
天の原 県展特別賞 柳本 順子（井原市）



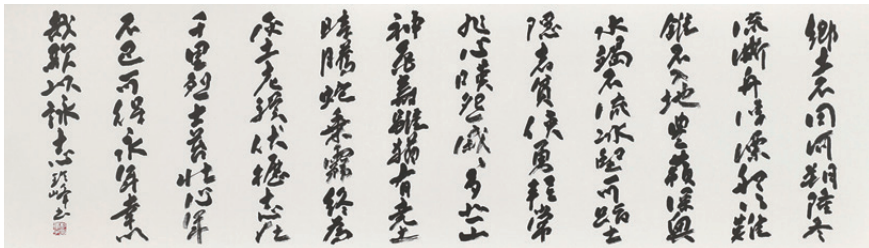
小夜ふけて 県展特別賞 柴田 香玉 (倉敷市)



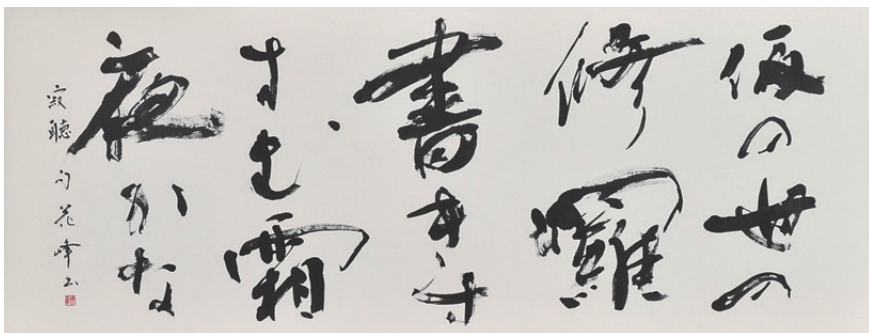
かささぎの 県展特別賞 鶴川 美華 (瀬戸内市)



山吹 県展特別賞 高越 霞邨 (倉敷市)



壮心 県展特別賞 杉 玲峰 (岡山市)



仮の世 県展特別賞 前田 花峰 (倉敷市)

〔審査講評〕書道部門に次ぐ応募数で「構図や色彩など基本的な技術は年々上がっている」と総評された。一般応募は昨年比27点減の440点。審査では、急速に進歩する人工知能（AI）の画像生成も話題になり「コンピューターにはまねできない、人間の想像力に今後も期待を寄せたい」との声が上がった。

そんな中、入賞作に選ばれたのは「斬新な視点で現実を切り取り、そこに想像を超える驚きを見いだした作品」。委嘱作を対象にする山陽新聞社大賞は、佐藤泰彦（岡山・中区海吉）の「晩秋」。棒に刺さった長靴や手袋が傾いた日差しの中でシルエットとなって浮かび上がる。「モチーフの面白さと、羊雲の色合いが印象的。撮り手の視線が素晴らしい」とたたえられた。

一般応募の最高賞・山陽新聞社賞は、池田滋（岡山・北区田益）の「カマキリ少年の大冒険」が射止めた。「小さな昆虫を主役にした着眼点がよく、写真の中に物語が広がる。色彩も鮮やか」と好評だった。

高速シャッターで一瞬の造形美を捉えたのは、県知事賞の佐藤秀敏（岡山・南区福富西）「水と光であそぶ」。「水の質感をうまく表現した。色の構成も計算されている」と評価された。県教育長賞の白石葉子（岡山・南区浦安西町）「春を見つけた」は、窓の外を見つめるネコの後ろ姿から思いが伝わってくるよう。

岡山市長賞は、どこか懐かしさを感じさせる街の一角を写した花野ひさし（笠岡・今立）の「踏切の時間」。羽ばたくフクロウの妙に人間くさい表情をキャッチした黒瀬邦彦（加賀・吉備中央町）「振り向いて」が県展特別賞、カエルの生命感とシカの骨の対比に思いを込めた林作治（都窪・早鳥町）「天国と地獄」が桃花賞を得た。

〈審査員＝飯沢耕太郎、北山由紀雄、末澤雅彦、長瀬正己の各氏〉



水と光であそぶ
岡山県知事賞 佐藤 秀敏（岡山市）



春を見つけた
岡山県教育長賞 白石 葉子（岡山市）



晩秋
山陽新聞社大賞 佐藤 泰彦（岡山市）



踏切の時間
岡山市長賞 花野 ひさし（笠岡市）



振り向いて
県展特別賞 黒瀬 邦彦（吉備中央町）



カマキリ少年の大冒険
山陽新聞社賞 池田 滋（岡山市）

〔審査講評〕 昨年より1点増えて15点となった一般応募作だが、等身像などの大作がなく「点数的にも他部門に比べて寂しい印象」での審査となった。それでも多彩な素材を自在に駆使したユニークな労作も見られ、「作品を作りきろうとする思いが伝わってきた」と評価された。

一般応募トップの県教育長賞は木村展山（岡山・北区横井上）の「エラーコード2023」。ワイヤが張られた直方体の中には、無数の赤い`とげ、を生やした異様な物体が浮かぶ。「心象風景を独自の感性と高い技術力で作品に昇華した」と支持を集めた。

岡山市長賞には、伊達冠石の一面から幾何学的な図形を削り出した宇津見樹相（津山・小田中）の「Switch」。今後の期待から「表面処理を意識しすぎず、作品全体として表現したいことを明確に」との助言があった。

委嘱作家から選ぶ山陽新聞社大賞は7回連続該当なし。「作家性は存分に発揮されているが、あともう一步、自由な発想と訴求力のある表現を」と奮起を促す声が上がった。

〈審査員＝上田久利、尾崎公彦、小林照尚、前嶋英輝の各氏〉



エラーコード2023
岡山県教育長賞 木村 展山（岡山市）



Switch
岡山市長賞 宇津見 樹相（津山市）